

1. 4 年間の取り組み、準備

【2015 年～2018 年】

「地域セレクション」の実施

選手の発掘、地域でのフットサルへ取り組むきっかけづくり、指導者のつながりを目的に実施。代表スタッフ（フットサル委員会技術委員）が巡回し、知的障がい者サッカーのトレセン地域ごとにフットサルのトレーニングを行った。最終的に日本代表候補選手はラージグループで 30 名程度となり、そこから本大会に向けて選手の絞込みを行うことができた。

「日本代表候補強化合宿」の実施

年 1 回、年明けの 1 月に上記セレクションで発掘した選手を招集し、強化合宿を行ってきた。フットサルに不慣れな選手のサッカースキルをどうフットサルに適応させていくかという観点で行なってきた。年に数回の活動しかないが、4 年間積み重ねることで、選手に積みかさなっていくものもある。攻撃、守備、セットプレー、GK の観点で、毎回のトレーニングにテーマを持って積み重ねていった。

【2019 年】

本大会への登録

INAS の主催する大会には、選手登録が必要である。知的障害があることの証明として、精神科への受診や、様々な書類申請、英語への翻訳等を行う関係で、2019 年 1 月合宿までには大会派遣選手を決定する必要があった。この手続きには選手負担が 4~5 万円かかる。また、渡航費には連盟の強化費が当てられるが、限りがあるため、選手自己負担を 30 万円と設定し、その旨も各家庭や保護者に通知、承諾してもらった。総予算の枠から、選手 10 名、スタッフ 4 名の派遣人数を決定した。

2. 直前合宿～本大会までの準備

本大会の年は、1 月、5 月、8 月、9 月、10 月、と 5 回の合宿を重ねることができた。メンバーも本大会に向けて選考し終わったメンバーだったため、戦術面での落とし込み、フットサルの技術向上に務めた。前回大会からの分析を行い、日本の長所を生かし、相手の長所を防ぐことができるようなトレーニングを行った。特に守備面でのチーム戦術が理解され、良い守備から良い攻撃への移行に向上が見られた。コンディショニングの面では、yo-yo テスト（間欠性回復力テストレベル 1）を実施し、能力を数値化し、地元でのトレーニング強度の向上を促した。



Yo-Yo テストは間欠性回復力テストレベル 1 を実施 所要時間は 20~30 分程度

最高スコアでも一般の平均値程度であったのは残念だが、一つの指標となり、地元でのトレーニングを怠らなかった

ミーティングでは、世界大会初参加の選手が多かったため、映像中心とし、前回大会経験選手からの話を多くし、世界の基準を伝えていった。また、選手自身からの発言、選手同士で話し合う機会、時間をしっかりと確保した。課題として、話すことはできるようになったが、相手の話を「聴く」という力はもっと伸ばすべきである。言いたいことは言うが、相手の発言に対して深めたり、広げたりキャッチボールになることが少ない。

また、10月合宿に持ち込みの怪我が4名おり、コンディション面での不安も大きかった。原因としては、大会が近づき、自チームでも強度を上げたためと推測される。島田トレーナーのおかげで、回復に向かったが、大会前だけでなく「日常のトレーニング強度」という点を見直していかなければならない。とくに知的障がい者サッカー、フットサルの分野では、この環境を整えるにはスタッフの介入も不可欠であると感じている。



3. 本大会について

オフザピッチについて

試合に関しては準備が全てであるといってきたことから、「直前合宿までの成果を発揮する」、「選手のモチベーションを整える」ことに注力した。現地での環境については、これまで経験したサッカー、フットサルのどの大会よりも素晴らしく（豪華すぎず、簡素すぎない）、気候、周辺環境、治安も含めて、街中をあげて良い環境が整っていた。

また、日本人として礼儀正しく、フレンドリーに関わることで、ホテル、大会関係者、他国のチームとも良い関係を築けていたと感じている。その中でも、今回は小林コーチが英語に堪能ということで、折衝や要求などの面においても、非常に活躍してくれた。通訳をつけるということも手段の一つだが、そういった人材と繋がる、見つけることも世界大会では重要である。



スコアとピッチを同時に撮影 分析に最適

清潔なトイレ ホテルもどこもキレイだった



会場は有料チケット、売店もある

オンザピッチについて

今回の日本代表の長所は、「良い守備からのカウンター」であった。前回大会から分析し、作成したプレーモデルを、体現できていた。また、相手がプレスに来たら回避する、サイドを突破したらファーサイドに詰めるといった引き出しは、4年前よりも増やすことができた。しかしながら、結果として失点が多く、勝ち点3しか得られなかったことは、受け止めなければならない。具体的には以下の改善点をあげる。

〈攻撃〉

- ・コントロールオリエンタード（意図的なボールコントロール）

プレス強度が強く、リーチの長い相手に対して、ボールを止めた瞬間を狙われる。1 s t タッチを足裏で動かす（出る、引く、なめる）習慣を身につける。

- ・フィニッシュ

今大会はミドルシュートも決まっていた。これは、世界のゴレイロの技術がフットサルに適応していないため、コースを防ぐには不十分であるからである。特に、ゴール近くで上を狙えると、得点の確率が上がる。また、ファーポストで速いボールを正確に合わせる技術も向上したい。

- ・前線でのタメ

プレス回避、攻撃の崩しのためにはピボが相手を背負ってプレーする必要があるが、大会では最後までピボが定まらなかった。自分が受けるという意味、身体の使い方、ボールの置き所、ピボは特殊なため、個別のトレーニングも必要である。



体の大きなゴレイロに対して、上のコースを狙う



張りボールのような試合球 世界大会ではよくある
どんなボールでも適応しなければならない

〈守備〉

- ・1 vs 1 の守備

トレーニングから「ボールを奪う守備」を意識させたが、試合では相手の技術、フィジカルの前に消極的な場面もあった。それでも奪いに行く姿勢を見せた方が相手も嫌がり、ミスも増えることを認識させると、積極的な姿勢に改善していった。細かい部分で、相手に正対した足で奪いに行く、利き足を意識する、シュートに対して背を向けない、スライディングでブロックするというフットサル特有の細かい点も向上していかないと、失点は減っていかない。

- ・守備の連動、連携

基本のライン設定はハーフラインとしたが、試合展開によって、前線からのプレス、第2 PK ラインまで引くこともトレーニングしてきた。試合中、選手がボール周囲の状況を感じ取ってプレーすることと、強力なリーダーシップを取れる選手を育てる必要がある。

- ・ゴレイロを中心とした守備

ゴレイロの2名は日常から健常者のチーム（関西2部、東京都1部）に所属しており、非常に良い関係を作り上げてきた。結果的な失点数は多いが、被シュートの数を考えると力を発揮していたし、今後もゴレイロを中心とした守備を構築していくことが日本の生命線となる。



〈セットプレー、特殊局面〉

- ・サインプレー、ブロックの技術

参加国の多くがサッカーチームということから、日本のデザインされたセットプレーはチャンスを作り出せていた。特にマンツーマンのチームはブロックに対して対応できていない。日本はこのブロックを生かすために、誰が、どの選手をブロックするとフリーが生まれるかという点まで決め事ではなく、選手が判断できるようにトレーニングしていくことが大切である。

- ・特殊局面について

フットサル特有の、退場（5 v s 4 の状況が2分間続く）、第2 PK（チームファウル5つ目以降のファウル）、パワープレー（GK が相手陣に入って数数的有利でプレーする）、については、トレーニングでも短い時間で行なっていたが、やはり大会中も起こった。経験値が少ない中で、必ずトレーニングしておく、決まり事を明確にしておく必要がある。

4. 4 年後に向けて

- ・選手育成について

選手は合宿を重ねるたびにフットサルに対して成長、適応していくのを見ることができた。選手が夢、目標を持って取り組むことこそが、一番の成長につながると感じている。これからも現場を周り、指導者の方と繋がり、可能性のある選手を発掘していき、挑戦する場所を用意していきたい。そして、めまぐるしくスピーディーに展開されるフットサルでは、オフザピッチでも自立、協力、決断力を磨いていくことがゲームにも影響する。生活面の報告書にもあるが、各地域でもオフザピッチの重要性を声を大にして伝えていきたい。



- ・指導者養成

監督として、前回大会から初めて4年間のサイクルを経験し、いかに日常のプレー環境が大切かということを感じた。合宿で成長したものの、残念なことに期間が空くと元に戻ってしまうことも見られる。選手自身の意識向上はもちろんのこと、JFAでも発信されているように「日常を変える」努力を地元の指導者の力を借りながら、続けていかなくてはならない。

また、代表スタッフ自身の能力向上として、JFAライセンス取得の義務化、スタッフの公募、障害特性の理解といったことも発信していきたいと考えている。

- ・フットサル委員会として

連盟組織の中に位置づけられていることで、サッカー関係者と協力して事業を行うことができています。その中で、やはり各地域のフットサル担当者を明確にし、窓口として機能してもらうとともに、各地域でのフットサルへの取り組みをまとめ、有効活用していく。近い将来、フットサルの地域対抗戦、チャンピオンシップという形で実施することで、目指すべき大会ができ、日頃からフットサルに取り組む循環を作り出していきたい。

5. まとめ

2015年の日本代表結成から、初めて4年のサイクルを終え、様々な方のご支援、御協力を感じながら、今大会を迎えることができました。新しい選手や指導者と出会い、一步一步、成長を実感し、選手が変わっていく様子を間近で見ることができたことは、監督として嬉しい限りです。その陰には、学校や職場の理解、身近な指導者の日々の努力、保護者の献身的なサポートがあったことに思いを馳せます。本当にありがとうございます。

世界大会は結果を求め、真剣勝負する場です。チームとして前回を超える結果が出せなかったことは非常に悔しいですが、大会が終わった今、日本チームの成長が見られ、世界との差を埋めていくことには悲壮感よりも、楽しみが大きくなっています。

連盟のビジョンにあるように、サッカーに続き、フットサルも「三位一体+普及」の事業がようやく確立してきました。地域の力、日本の力を結集しながら、歩みを止めずに進んでいくのみです。これからも、皆様の力強い御協力、御支援をいただきながら、次の4年に向けて後押ししていきたいと思います。ありがとうございました。

